

北海道余市町における小規模ワイナリーの展開

北海道知内高等学校教諭 土田 慎一郎

1 はじめに

近年、日本の農村地域において原料生産・醸造・販売を一手に担う小規模ワイナリーが開設される事例が増えている（鹿取, 2016）。その先進地域は、長野県千曲川流域や北海道余市町である（玉村, 2013；鹿取, 2016；寺谷, 2015）。本稿は、筆者が2016年から19年にかけて、北海道余市町における小規模ワイナリーの実態及び参入経緯を調査した結果を短く取りまとめたものである。なお、本稿は2020年3月に北海道大学大学院文学研究科へ提出した筆者の修士論文の内容に基づいている。

2 余市町の地域概観

北海道余市町は北海道の南西部に位置し、東部は小樽市、西部は古平町、南部は仁木町、赤井川村と接する(図1)。人口は2015年度で19750人(国勢調査)であり、後志管内では小樽市に次ぐ人口規模の自治体となっている。町の中央には南北に余市川が流れており、流域に発達する沖積低地に市街地や農地が広がる。

同町は江戸末期よりニシン漁が発展し、往時は「千石場所」と謳われたが、昭和期に入り漁獲は激減し、ニシン漁は著しく衰退した。一方でニシン漁と同様に果樹栽培もまた明治期より発展した。この果樹栽培は余市町の比較的温暖な気候や、ニシン漁で蓄積された資本の存在を基盤として、技術革新や販路開拓など農業関係者の努力の結果、大正期から昭和戦前・戦後期にかけて発展した。余市町の果樹栽培はリンゴや生食用ブドウが主作物であり、特にリンゴは明治期より栽培が本格化し、同町の発展を支える品目であったといえる。しかし、これらのリンゴ・生食用ブドウを中心とした果樹栽培も、1970年頃より徐々に衰退しつつある(図2)。また果樹産業の衰退に伴って耕作放棄地が増加していることも図2から同様に読み取れる。その要因としては、高度経済成長期の「向都離村」による農業従事者の減少・高齢化、品種更新の失敗、自然災害(台風)の影響、などが考えられる。このような情勢の中で、町内の果樹農家を中心に進められたのがワイン醸造用のブドウ栽培であった。

3 ワインブドウ栽培の導入経緯

上記のような果樹栽培衰退に呼応する形で、町内果樹農家7名によるワインブドウ栽培の導入に向けた活動が1980年代前後より進められた。一方で彼らの活動に先んじて、1970年代より道立中央農業試験場によるワインブドウ栽培普及に向けた研究活動も行われており、それも余市町におけるワインブドウ導入の背景であるといえる。これらの活動の結果として、1983年より同町では北海道ワインや余市ワインなど地域内外ワイナリーと契約を結びワインブドウを栽培する農家が出現することとなった。余市町では、このような契約栽培の形態としてワインブドウ栽培が本格的に導入された。

4 小規模ワイナリーの新規参入

上記のように、余市町では地域内外醸造資本への原料供給を目的としたワインブドウ栽培が1980年代から始められ、2000年代に至るまで多くの生産者が参入することとなった。だがそのような生産状況の中、ブドウ生産・ワイン醸造・販売を一手に行う小規模ワイナリーであるAワイナリーが開業し、その後同様な生産形態をとるワイナリーが相次いで同町へ参入した。

これらワイナリーの特徴として、以下の点が挙げられる。第一に、その経営者が余市町外からの移住者である事例が多くみられる点である。しかも彼らは北海道外からの移住者であるケースが多く、広範な地域からの参入が行われている。次に、それらのワイナリーは家族経営が主であり、極めて少数の労働力で経営が行われている点である。最後に、これらの小規模ワイナリーは上述のようにワインブドウ栽培から醸造・販売まで一括に取り行うため、原料ブドウを他生産者から供給する形態のワイナリーとは異なり、ワイナリー周辺に展開する広大なワインブドウ圃場を有している点である。

以上のように、余市町では大規模ワイナリーへ原料供給を行うワインブドウ農場と、自前でワイン醸造を行う小規模ワイナリーが混然と存在することとなり、余市川両岸の丘陵地帯を中心にワインブドウ圃場が展開する土地利用が現出されている（図3）。特に小規模ワイナリーが点在する余市町登地区では、ガレージのような小規模ワイナリーの周囲にワインブドウ畑が広がる農業景観が形成されている（図4）。

5 ワインツーリズムの実態

これら小規模ワイナリーの参入に伴い、余市町登地区では2015年より生産者を主体とした周遊型ワインイベントが実施されている。これは、同地区に点在する各ワイナリーやワインブドウ農園で提供されるワインの試飲を目的として、参加者が基本的に徒歩で地区内を巡るイベントである（図5）。2019年度は26の生産者がワインの試飲を提供し、900人の参加者が道内外から訪問した。また、当イベントにはワイン生産者のみならず、近隣市町村から飲食店や食料品製造者らが参加し、「ワインに合う」食べ物を提供していた。

このような周遊型ワインイベントは、やはりワイナリーを始めとしたワイン生産者が地区内に多数参入している点を基盤となるが、加えて彼らのワインブドウ生産による土地利用によって形成される広大なワインブドウ栽培景観も参加者の徒歩周遊を促していると考えられる。また、同町のワイナリーは平時に訪問者を受け入れていないものが多く、当該イベントはそのようなワイナリーへ訪問することができるまたとない機会である。この点もまた消費者のイベント参加を促しているといえる。

6 小規模ワイナリー参入の背景

これらの小規模ワイナリーが余市町に相次いで開業する背景には、第一に同町における

「ワイン特区」の指定が挙げられる。この特区内では、酒造免許取得に必要な最低醸造数量が引き下げられ、ワイン生産の障壁が緩和される。よって小規模なワイン生産を特徴とするワイナリーの経営が可能となり、小規模ワイナリーが参入しやすくなっている。余市町では2011年にワイン特区へ指定され、その後ワイナリーの参入が活発化している。

また、ワイン特区以外にも、ピノ・ノワールなどの高級仏系ブドウ品種の栽培が余市町で成功を収めている点、Aワイナリーのように新規参入希望者の研修に協力的なワイナリーが存在する点も、小規模ワイナリーの相次ぐ参入の背景と考えられる。

7 おわりに

このように北海道余市町では、果樹産業の衰退と呼応する形でワインブドウ栽培が導入され発展した。またそれを1つの基盤とし、加えて規制緩和（ワイン特区）の影響などもあり、移住者を中心とした小規模ワイナリーの開業が盛んとなっている。そしてこれらの展開が盛んな登地区では、ワイン生産者の集積や広大な農業景観を活用し、周遊型のワインイベントが毎年実践されており、一定の交流人口を創出している。

しかし、先述したイベント等での訪問者は、ワイナリーやワインブドウ畑がみられる登地区内の周遊にとどまる傾向がみられており、中心市街地への訪問人口を増加させる要素とは現時点でなっていないと考えられる。中心市街地には数は少ないが登地区のワインを取り扱う酒販店やワインバーが立地しており、これらの広報が必要である。

また、ワインツーリズムでは多数の個性的なワイナリーが同地区内に立地することで訪問者の周遊型観光を実現させている事例が海外でみられている（例えば、菊地,2018）が、余市町は現状11軒のワイナリーが立地するにとどまっている。余市町経済部農林水産課の担当者の話によると、同町でのワイン生産希望者は年々増加しているものの、彼らに提供する遊休農地やワイナリー用の物件（離農者の家屋等）が不足している状況であるという。一方で、より多数のワイナリーが立地することとなった場合、それらワイナリーの「淘汰」が起こるのではないかと危惧している、とも話していた。

このように、余市町における小規模ワイナリーの参入を地域振興に資する観光資源とする為には、ワイナリー関連交流人口の中心市街地への創出、農地や醸造場用物件の確保、個々のワイナリーの持続性向上、これらの課題を解決する事が必要である。

(参考文献)

鹿取みゆき（2016）：『日本ワイン北海道』虹有社。

菊地俊夫（2018）：オーストラリアのハンターヴァレーにおけるワインツーリズムの地域的展開とその特徴。菊地俊夫編『ツーリズムの地理学』130-141，二宮書店。

玉村豊男（2013）：『千曲川ワインバレー 新しい農業への視点』集英社新書。

寺谷亮司（2015）：北海道におけるワイン産業の新動向-余市産地と空知産地を中心に-，愛媛大学法文学部論集，39，69-114。

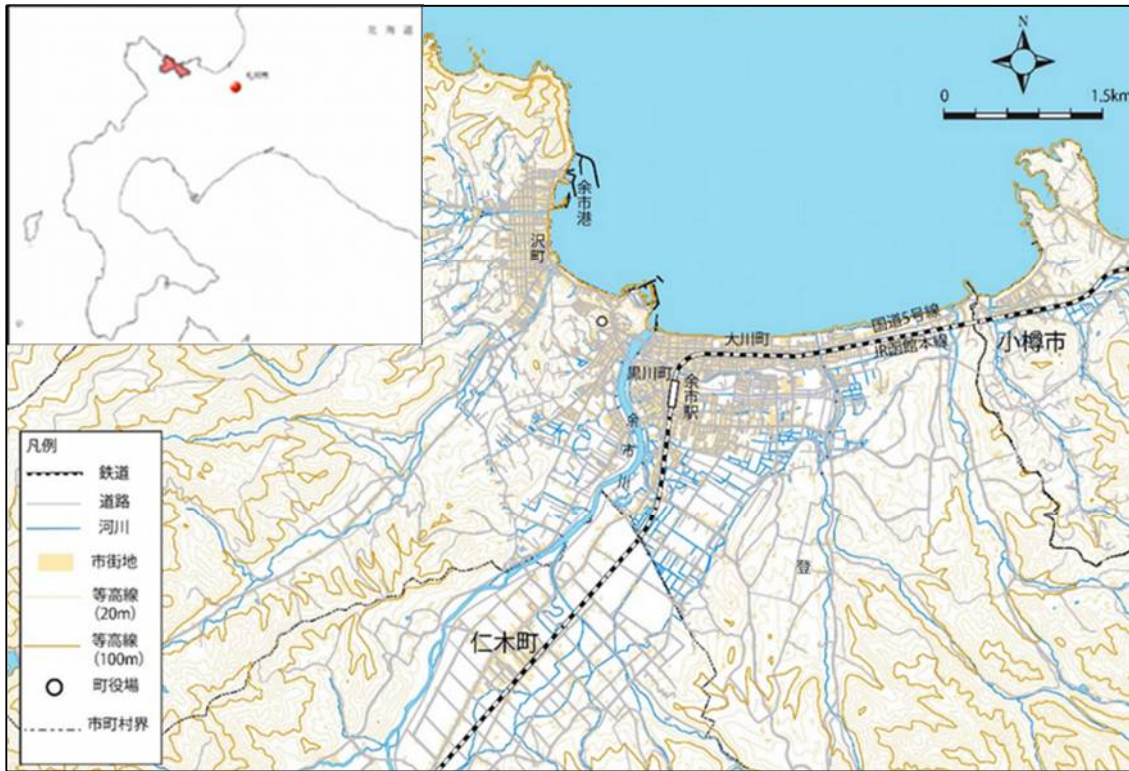


図1) 余市町の位置及び地域概観図

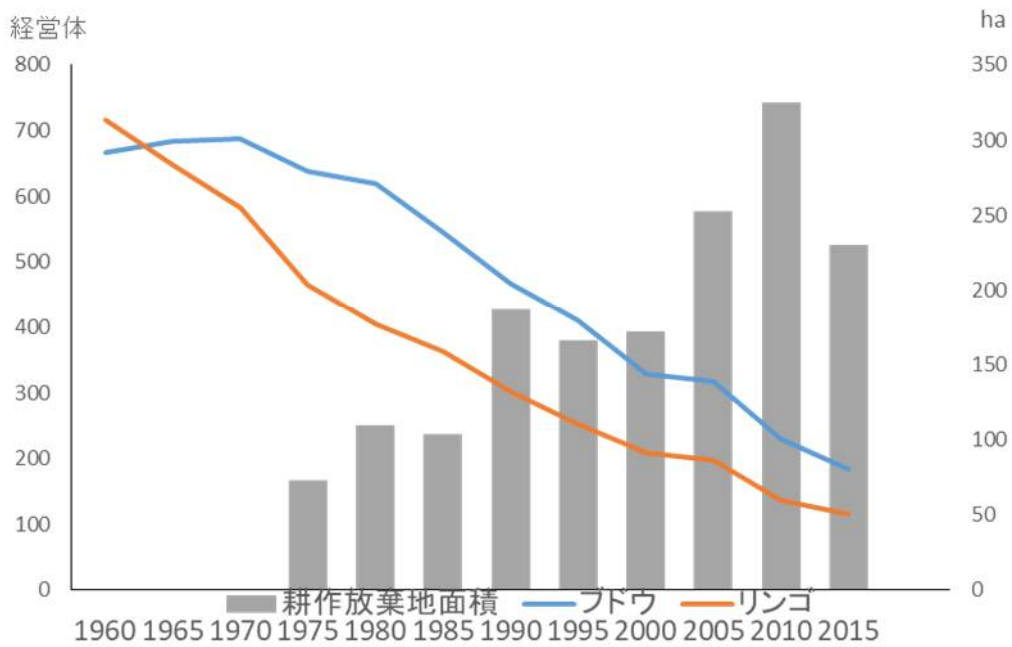


図2) 余市町におけるブドウ・リンゴ栽培経営体及び耕作放棄地面積の推移 (農林業センサスを基に作成)



図3) 余市町におけるワインブドウ圃場及び小規模ワイナリーの分布と登地区の範囲
 (ワインブドウ圃場は航空写真の判読及び現地調査を踏まえて ArcGIS を用い作図した.)



図4) 余市町登地区で見られる小規模ワイナリー (左) とそのワインブドウ圃場 (右)
 (写真は A ワイナリー. 2019 年筆者撮影.)



図 5) ワイントーリズム参加者の様子

(上は参加者が農場間を徒歩で移動している様子. 下はAワイナリーのワインブドウ園を背景に記念写真をとる参加者の様子. 園場の前には, イベント用に撮影用の看板が設置されていた.)

高校生向けの市内巡検コース

藤女子高等学校・非 大久保 雅弘

1 はじめに

2022年度からの新高等学校学習指導要領では「地理総合」(2単位)が必修科目となる。

その内容は

- A 地図や地理情報システムで捉える現代世界 (1) 地図や地理情報システムと現代世界
 - B 国際理解と国際協力 (1) 生活文化の多様性と国際理解 (2) 地球的課題と国際協力
 - C 持続可能な地域づくりと私たち (1) 自然環境と防災 (2) 生活圏の調査と地域の展望 . . .
- となっている。

最後の(2)生活圏の調査と地域の展望では、地域調査の前に「巡検」を実施しなければならない。

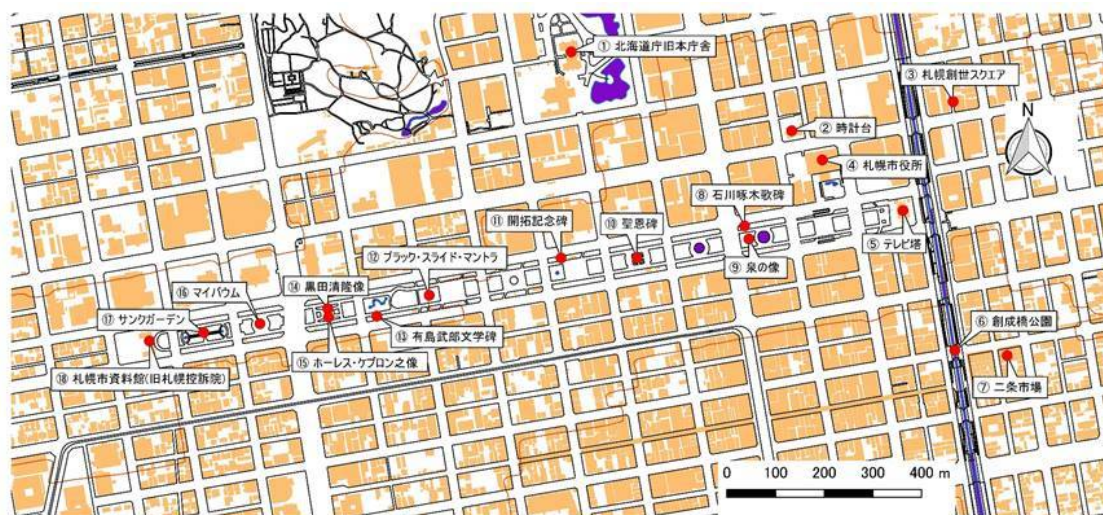
かつての地理必修化の頃(昭和50年代)は、札幌市内の公立高校で「1日バス巡検」が実施されていた。市内の地形や各施設を見学する内容だったが、担当者の準備、時間割の変更が大変であった。今回、市内巡検を実施するにしても、2~3時間程度が現実的である。

筆者は、札幌商工会議所観光ボランティアガイドの会に所属しているが、こちらでは同行案内コース(観光客や修学旅行生向け)がいくつか設定されている。

このコースを土台にすると、巡検を経験したことのない教員でも可能と思う。

2 大通公園散策コース(さっぽろ基本コース)

1869年、後志通(現大通公園を境に北は官地、南は町人・商人の地と定め、南北が区切られた。1871年、この空閑地が火防線の役割を果たすことになり、街づくりの基軸となった。テレビ塔のある西1丁目から西丁目まで全長約1.5kmに及び、緑地面積は8.2haになる。



(国土交通省国土地理院の基盤地図情報をもとにQGISで作成)

- ① 北海道庁旧本庁舎 1888年に完成。通称「赤れんが庁舎」と呼ばれ、主要建材のレンガ・硬石・木材等は道産のものを用いている。
- ② 時計台
- ③ さっぽろ創世スクエア
- ④ 札幌市役所
- ⑤ テレビ塔
- ⑥ 創成川公園 2011年、創成トンネル建設によって地上部に整備された公園。
- ⑦ 二条市場 明治初期に石狩浜で漁業を営む人々が魚介類を販売したことが始まりといわれる。
- ⑧ 石川啄木歌碑(1981年設置 坂担道 作) 石川啄木の没後70年を記念して建てられた。
- ⑨ 泉の碑(1959年設置 本郷新 作) 元ニッカウキスキー会長竹鶴政孝氏が寄贈したブロンズ像である。
- ⑩ 聖恩碑(1939年設置) 1936年の昭和天皇行幸を記念したもの。1937年の市営水道の通水開始も記念している。
- ⑪ 開拓記念碑(1899年偕楽園より移設) 1886年に偕楽園(札幌最初の公園)に設置された。
- ⑫ ブラック・スライド・マントラ(1992年設置イサム・ノグチ作) モエレ沼公園を設計したノグチの提案で設置された。
- ⑬ 有島武郎文学碑(1962年設置 藤川基 作) 有島武郎は札幌農学校19期生で、母校の英語教師となった。
- ⑭ 黒田清隆像(1967年設置) 黒田清隆は開拓使長官として北海道開拓の基礎を築き、後に内閣総理大臣となった。
- ⑮ ホーレス・ケブロン之像(1967年設置) 開拓使顧問として北海道開拓の基本方針を示した。
- ⑯ マイバウム(2001年復元) 元々は札幌の姉妹都市ミュンヘンから贈られたモニュメントだが、老朽化のため復元された。
- ⑰ サークガーデン 西洋式の庭園。庭園内の「若い女の像」は、西2丁目の「開拓母の像」と同じく佐藤忠良作である。
- ⑱ 札幌市資料館(旧札幌控訴院) 1926年に札幌控訴院(後の札幌高等裁判所)として建てられた。

3 大通公園の文学碑(高文連文芸部全道大会のコース)

2019年10月3日(木)に実施された第17回全道高等学校文芸研究大会の同行案内を紹介する。当日は参加生徒98名と引率教員が、北大コース4グループと大通コース4グループに分かれ、ガイド8名から説明を受けた。生徒たちは、この巡検を参考に詩や短歌を詠むという企画だった。

(当日の日程・コース)

かでの2・7出発(12:40)→地下歩行空間→オーロラタウン→テレビ塔(外観のみ)→時計台(外観のみ)→石川啄木像歌碑→吉井勇歌碑→聖恩碑 →開拓記念碑→ケブロン像→サークガーデン→札幌市資料館→自由散策→かでの2・7解散(16:00)



交通量の多い場所を移動するので、グループの先頭はガイド、最後尾はグループ・リーダー(生徒)が務めた。西4丁目の吉井勇歌碑。歌人・劇作家の吉井勇は、1955年に札幌を訪れ「北遊小吟」5首を詠んだ。その中の一首であるこの歌には、ライラックを愛する札幌市民の心情が表現されている。



西6丁目の開拓記念碑。西8丁目のブラック・スライド・マントラ(イサム・ノグチの作品)。



西9丁目の有島武郎文学碑。代表作の多くは北海道が舞台となっている。西10丁目のケブロン像。



西 11 丁目のマイバウム(ミュンヘンからの寄贈)。西 12 丁目のサンクガーデンと札幌市資料館。

4 札幌中心部の歴史的建物(レトロ建築物コース)

札幌商工会議所の「レトロ建築物コース」は次のような内容である。

北海道庁旧本庁舎(赤れんが庁舎)→旧札幌農学校演武場(時計台)→日本基督教団札幌教会(旧札幌美似教会堂)→サッポロファクトリーレンガ館→旧永山武四郎邸及び旧三菱鉱業寮

(1)北海道庁旧本庁舎

通称「赤れんが庁舎」と呼ばれるこの建物は、1886年に北海道庁設置にともない建築に着手し、1888年に完成した。設計は、道庁土木課の平井晴二郎といわれている。主要建材のレンガ・硬石・木材および石灰等は、道産のものを用いている。1896年、八角塔および換気塔などの突出部を撤去した。1909年、火災によりレンガを残して室内および屋根を焼失した。その後、レンガ壁体の補修と内部の改修を行った。1968年、道庁舎の新築に伴い、北海道百年記念事業の1つとして、創建当時の姿に修復した。その後、会議室、道立文書館等に利用されたが、現在は修復工事のため閉館している。



2019年9月12日(木)撮影。2F樺太関係資料館(南樺太に関する資料と現在のサハリン州との交流を紹介)。

(2) 旧札幌農学校演武場(時計台)

(3) 日本基督教団札幌教会(旧札幌美以教会堂)

創成川に面して建っている札幌軟石の教会堂で、同教会の信者でもあった道庁土木課技手の間山千代勝の設計により1904年竣工した。札幌メソジスト教会は1889年に発足。最初の教会は木造で南1条西2丁目に建てられた。1897年には、現在地である南1条東1丁目に2代目の木造教会堂を新築したが、1903年に延焼してしまった。教会堂は片側だけに塔をもつロマネスク風のたたずまいだが、窓頂部のゆるく尖ったアーチや十字架、正面2階の簡略化されたバラ窓などの細部にはゴシック風の意匠も見られる。



2019年11月13日(水)同行案内研修会の際に撮影。以前あった幼稚園の屋根跡が残っている。

(4) サッポロファクトリーレンガ館

日本のビール産業はこの地に始まる。1876年、現在地に開拓使麦酒醸造所が設けられた。その後、大倉組を経て引き継いだ札幌麦酒株式会社(サッポロビールの前身)は、1892年新醸造所を建設。当時、日本最大の近代工場でこれが1993年レンガ館として再生した赤レンガの建物群の原型となる。



旧機関室のバトルメント飾り(西洋の城壁や要塞などでみられる鋸壁)は1915年の改造時に付けられた。

(5) 旧永山武四郎邸及び旧三菱鉱業寮

5 おわりに

新型コロナウイルス対策のため、市内の観光施設は閉鎖、観光ボランティアガイドの活動も休止している。活動が再開したら、時計台に来る修学旅行生に声をかけて、無料ウォーキングガイドを実施したいと思う。

(引用文献)

札幌商工会議所『札幌シティガイド』(札幌商工会議所, 2011年)

札幌商工会議所観光ボランティアガイドの会「令和元年度同行案内研修会」資料(2019年)

(引用ウェブサイト)

ワールドリサーチ(気軽に国際理解) <http://kokusairikai.web.fc2.com>

札幌の文化財(web版) <https://www.city.sapporo.jp/shimin/bunkazai/pdf/index.html>

2019年度 札幌地理サークル 会の消息

<p>第466回 研究発表 6月30日(日)14:35-16:35 北海学園大学 7号館 D40 番教室</p>	<p>フォーラム 高校『地理総合』必修化に向けて-GIS 実践を中心として 金森正郎(小樽潮陵高, 小樽商科大・非) [共催]北海道地理学会春季学術大会</p>
<p>第467回 研究発表・総会 8月24日(土)18:30~19:30 リファインドコーヒー (白石区菊水8条2丁目1)</p>	<p>1. 「札幌の面白い地名について」 山内正明(札幌地理サークル会長) 2. 2019年度総会</p>
<p>第468回 研究発表 10月26日(土)18:00~19:30 リファインドコーヒー (白石区菊水8条2丁目1)</p>	<p>1. 「屯田兵村はタウンシップ制を模範にしたのか」 金森正郎(小樽潮陵高, 小樽商科大・非)</p>
<p>第469回 研究発表 12月7日(土)18:00-20:00 リファインドコーヒー (白石区菊水8条2丁目1)</p>	<p>1. 「北海道道東地方におけるグリーンツーリズムの展開」 高橋真太郎(北海道大学大学院文学研究科修士課程) 2. 「北海道余市町における果樹産業の展開」 土田慎一郎(北海道大学大学院文学研究科修士課程)</p>

札幌地理サークル 2019年度 決算報告

収 入		支 出	
18年度繰越金	39753	会誌印刷費	0
会 費	34000	郵 送 費	16556
		文具・消耗品	2200
		Web管理費	5000
		予 備 費	0
収 入 合 計	73753	支 出 合 計	23756

繰越金 49997

札幌地理サークル 2020年度 予算案

収 入		支 出	
19年度繰越金	49997	会誌印刷費	30000
会 費	20000	郵 送 費	20000
		文具・消耗品	5000
		Web管理費	5000
		予 備 費	9997
収 入 合 計	69997	支 出 合 計	69997

会 誌 第 53 号

令和2年5月

札幌地理サークル

会 長 山内 正明 td834777@fb3.so-net.ne.jp

企画・案内 金森 正郎(小樽潮陵) kmasao@plum.ocn.ne.jp

会誌担当 大久保雅弘(藤女子・非) moasa@ab.auone-net.jp

ウェブサイト: <http://chiricircle.michikusa.jp>